

鎌田 茂雄 国際仏教学大学院大学教授

津田 眞一 国際仏教学大学院大学教授

杉山 二郎 国際仏教学大学院大学教授

斎藤 達也 国際仏教学大学院大学
附属図書館職員

鳥居 達久 国際仏教学大学院大学
博士後期課程

早川 道雄 国際仏教学大学院大学
博士後期課程

武田 浩学 国際仏教学大学院大学
博士後期課程

Hubert Durt 国際仏教学大学院大学教授

Christina Scherrer-Schaub ロイザンヌ大学教授

北野 新太郎 国際仏教学大学院大学
博士後期課程

四津谷 孝道 国際仏教学研究
専任研究員

原 實 国際仏教学大学院大学教授

昨年から今年にかけて、われわれの仏教学にとつての象徴的な存在であられた三人の大家が相ついで亡くなられた。山城康四郎博士、中村元博士、そして本学委員教授 J・W・デ・ヨンク博士である。三先生にそれぞれ非常に学恩を蒙っている筆者自身の個人的な悲しみ、淋しさとは別に、筆者は仏教学にとつて一の時代が終つたことを実感せざるを得ない。思えば、われわれの所謂近代仏教学は近代日本というわれわれ自身の歴史の一つの必然であつた。それは明治期、近代ヨーロッパという普遍原理とそれに乗つた布教キリスト教の圧倒的な攻勢を辛くとも凌ぐべく仏教がとつた緊急避難であつた。それは相手側の自由主義神学の精神と方法に便乗したものであり、それ故に成功した。しかし、そこは提示された近代的な仏教思想像は異様なものであつた。仏教という思想は、本来、その種の人間の合理とヒューマニズムとは異質のものであつたのである。

自家のヨーロッパにおいては、自由主義神学は一九二〇年代、K・バルトの所謂危機神学・弁証法神学によつて覆えされ、そこにキリスト教本来の問題が露呈されることになつた。しかし、われわれは一度の成功に安住し、この八十年間、われわれ自身の仏教思想の危機から目を外らし続けてきたのである。だから

そこわれわれは、今改めて近代仏教学の終焉を意識しなければならぬし、またそれが三先生（を始めとする偉大な先学達）を最も正しい意味で尊敬することでもあると考へるのである。蓋し仏教本来の問題は、近代仏教学のその意識された終焉において、ただしそれをその必然的な前提条件として、われわれに對して（八十年遅れの言葉を使うなら、まさに）弁証法的に提示される筈のものであるからである。

(S・T)

平成十二年三月二十五日 印刷
平成十二年三月三十一日 発行

国際仏教学大学院大学
研究紀要（第二号）
（非売品）

発行者 原 實
発行所 〒105-0001
東京都港区虎ノ門五十三番二十三

国際仏教学大学院大学
電話（〇三）三四三四一六九五三

印刷所 〒100-0006

東京都千代田区内神田二一八一二
富士リプロ株式会社